Ⅲ　まとめる・振り返る

単元や本時で、どのような学び方をしてきたのか、学んだことや身に付けたことは何なのかなど、子供が自覚し、納得解を得ていく時間にしていきましょう。まとめや振り返りの時間を確保していくことが「学びを意味付ける力」を育むことにつながるのです。

めざす自ら学ぶ子供の姿

学んだ意味を見出す
- 今日の学習は、〇〇にも**使えそうだ**。
- 前に学んだことと同じ考え方で問題を解くことが**できたよ**。
- ここが大事だから、ここがまだ不安だから家庭学習で**復習しよう**。

学び合う意味を見出す
- 友達の**考えを聞いて、〇〇に変わった**よ。
- ◇◇さんの**おかげでできるようになった**。
- 自分も〇〇さん**のようになりたい**な。

学びを次につなげる
- 今日学んだことって、〇〇にも当てはまるような気がするから**調べてみたい**。
- 今日は、得点できる方法を考えたけれど、ゲームで負けたから明日は守り方を**考えたい**。

「学びを意味付ける」ために大切にしたい教師の姿勢

自ら学んだり、学び合ったりしてきたことを実感できる振り返りは･･･？

ポイント⑦　アウトプットする場を設定する

何をどのようにアウトプットさせていくのかを構想しましょう。友達同士で、分かったことやできるようになったことなどを物語る場（アウトプットする場）を設け、互いに確認し合ったり、補い合ったりした後に、ノートに書かせることも有効です！

ポイント⑧　学び方のよさを実感させる

授業の終末では、今日の学び方はどうだったか全体で振り返りましょう。そして、次回はここを改善していこうと子供達と一緒に合意形成を図り、よかった学び方は大いに価値付け、自分（達）の成長を実感し、意欲の向上につなげていきましょう！

Note

<u>アウトプットの場面では、以下のような視点</u>をもたせましょう。
- 分かったこと、できるようになったこと、そうなった理由は何か。
- 今日の学習は、どんなことに使えそうか。
- 学習する前と比べて、どんなことが変わったのか。
- 今日の学習で、自分が頑張ったことはどんなことか。　など

★　主体的・対話的な学びを促すために、子供に任せる時間を設け、自ら学ぶ力と学び合う力、そして自己肯定感、自己有用感を育みましょう！

※　本リーフレットに関する授業イメージを具体化した補足資料１～４（算数、道徳、ペア・グループ学習、全体での話合い）もご活用ください。
※　本リーフレット及び補足資料は、南会津教育事務所ＨＰで見ることができます。

南会津教育事務所ＨＰ

南会津のよさを生かした　南会津版「授業スタンダード」リーフレット

自ら学ぶ子供の育成　8つのポイント

令和５年１月　南会津教育事務所

大切にしたい「８つのポイント」

① 子供の学びの姿をイメージする
② 反応やつぶやきを拾う
③ 子供のつまずきに寄り添う
④ 複式学級の指導形式のよさを取り入れる
⑤ 子供の聞き合う力を高める
⑥ 「卓球型」から「バレーボール型」で話し合う力を高める
⑦ アウトプットする場を設定する
⑧ 学び方のよさを実感させる

南会津の教育の主な強みと弱み

強み
- ○ 子供一人一人を主役にする教育活動を展開することができる。
- ○ 子供一人一人の学びの状況をじっくりと見取ることができる。
- ○ 異学年が直接的･間接的に関わることで、思いやりの心が育まれ、親和的で協働的な学校･学級経営につながっている。
- ○ 地域との深いつながりがあり、連携した教育活動が展開できている。

弱み
- ● 教師が先回りして指示したり援助したりすることで、子供が受け身になってしまうことがある。
- ● 子供同士の関係が近く、また人間関係が固定されていて競争意識が低くなりがちである。
- ● 多様な考えや意見が引き出せず、学びが深まらないことがある。

強みを生かせば、子供に任せる機会や時間をたっぷり与えることができるということですね！

本リーフレット作成にあたって

南会津には、少人数や複式学級のよさを生かした教育活動の実践が展開されてきた実績（財産）があります！全国学力･学習状況調査やふくしま学力調査の児童生徒質問紙の結果を分析すると、全体的に複式学級に在籍する子供達の学習意欲や協働的な学びに対する意識が高いことが分かりました。そこで、そのよさを生かし、主体的に学ぶ授業の中で、将来を生き抜く力を身に付けるための土台となる**「自ら学ぶ子供の育成」**が学力向上の鍵になると考えています！そこで8つのポイントです！

このような悩みはありませんか？

教師が関わり過ぎて、子供が受け身になってしまっていると感じるなぁ･･･

子供達から問いを引き出せれば･･･

子供の発言がないと焦ってしまうなぁ…

自ら学んだり、学び合ったりする力を高めるためには･･･？

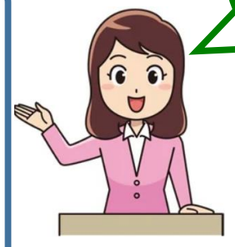
一部の子供だけで話合いが進んでしまうことが多いなぁ…

沈黙は金

教師は、話し過ぎる傾向にあることを自覚しなければなりません。発問した後に反応がないと不安で焦ってしまい、さらに問いかけてしまうこともあるのではないでしょうか。

教師が話し過ぎていたり、意味もなく子供の発言を繰り返したりしている授業は、子供の思考を止めてしまっているのです。まさに「沈黙は金」。**沈黙は子供が思考している時間**なのです。「発問したら待つ」。こうした教師の関わりの継続により、子供たちは考えることの重要性を実感していくのです。

「ふくしまの授業スタンダード」をもとに、複式学級の授業スタイルのよさも取り入れていきませんか？



注：ここで示した内容は一例であり、授業のねらいや学習内容に応じて変わります。

Ⅰ　つかむ　（課題を把握し、見通しをもつ）

「問い」は学びの原動力です。経験や既習事項と関連付けながら学習課題を設定しようとしたり、学習課題を解決するための考え方や方法を見いだそうとしたりする学びを繰り返していくことで、子供自身が「問いを見出していく力」を身に付けていきます。この力は、自ら学ぶ子供を育むことにつながるのです。

めざす自ら学ぶ子供の姿

批判的な思考をもつ
本当にそうなのかな？
別の方法はないのかな？

分からない部分を焦点化する
解決したいけど、**ここが分からない**んだ。

意欲を表出する
やってみ**たい**！
調べてみ**たい**！
考えてみ**たい**！
もっとこうし**たい**！

疑問を感じる
あれ？どうして？
どうなっているのかな？
どうすればできそうかな？

解決の方法を見出す
前に使った考えを使えばできそうだ！

違いや分からないことを見出す
今までの学習と**〇〇が違うぞ**。
よく分からないなぁ？

協働して学ぶ必要感をもつ
友達の考えは何かな？
友達と一緒に解決したいな。

「問いを見いだしていく力」を育むために大切にしたい教師の姿勢

子供達から問いを引き出せれば･･･

ポイント①　子供の学びの姿をイメージする

目指す子供の姿（ゴール）を明確にして授業に臨むことで、授業のイメージが明確になってきます。教材との出合いの場面では、
「この子供は、こんなことを言いそうだ。」
「こんな工夫したら、こんな考え方や方法についての反応が返ってきそうだな。」
「つまずきそうなところは、ここだな。」
とイメージしておきましょう。
そうすることで、問いを引き出す教師の問い返しも事前に考えることができます。

子供の反応が薄い時は、どうすれば･･･

ポイント②　反応やつぶやきを拾う

表情の変化などの反応や「あっ！」、「いいねぇ」、「う～ん」、「えーっ！」、「おおっ」などのつぶやきを拾い、その理由を聞いてみましょう。

ポイント③　子供のつまずきに寄り添う

子供の「分からないこと」や「うまくいかないこと」などといった場面を大切に受け止め、つまずきを解決するための方法を子供達に問うことも考えておきましょう。分からないことをみんなで解決していくことが授業です。つまずきを全体で共有し、「自分達で解決したい」という意識をもたせていきましょう。

Note

- 具体物やＩＣＴを活用して教材に出合わせ、視覚的に捉えさせていくことも大切です。その際は、見せすぎや与えすぎに注意し、様々な気付きを引き出すようにしましょう！

Ⅱ　深める　（追究し、解決する）

大切にしたい教師の構えは「子供に委ねる・任せる」ことです。支援・指導したい気持ちをぐっとこらえ、「自ら学ぶ力」と「学び合う力」を育んでいくようにしましょう。最初は難しいかもしれませんが、「子供を信じて待つ」、このような教師の姿勢が、子供の学び方を変えていくはずです。

めざす自ら学ぶ子供の姿

自分や友達の考えを明確にする問い返し
【事実】「それは、**どういうこと**なの？」
【方法】「**どのように**して考えたの？」
【理由】「**どうして**そう言えるの？」
【根拠】「**どこから**そう考えたの？」

反応しながら聞く
「うん、なるほど」
「それ、いいねぇ」
「自分と同じだ」
「自分は違うよ」

考えや考え方を共有していく問いかけ
【再生】「〇〇さんの説明で**大切な部分は**どこだろう？」
【発見】「〇〇さんの**考え方はどこが**いいのかな？」
【予想】「〇〇さんの説明の**続きを考えて**みよう。」
【言い換え】「〇〇さんの考えを**別の言い方**で言うと何だろう？」

「自ら学ぶ」「学び合う力」を育むために大切にしたい教師の姿勢

全体での話合いの時に教師が関わり過ぎて、子供が受け身になってしまっているなぁ･･･

ポイント④　複式学級の指導形式のよさを取り入れる

複式学級では、「直接指導」と「間接指導」を取り入れて指導にあたります。特に追究場面では、問いについて１人で考えた後、学習リーダーの子供が中心となり、グループで話合いを展開していきます。
「間接指導」として子供に委ね、子供達に試行錯誤させたり、失敗を経験させたりしながら自ら学ぶ力を身に付けさせていきましょう。
追究する場面の最初は、全体を見る位置で子供達の様子（学習の進み具合・活動内容）を見守り、すぐに手を差し伸べないようにしていきましょう。最後は、タイミングを見計らい、学級全体で子供達の考えを収束し、整理する場面をつくりましょう。

ポイント⑤　子供の聞き合う力を高める

子供の発言を教師が繰り返していませんか？子供の発言を繰り返すことは、友達の発言を大切に聞こうとしない子供を育ててしまいます。
教師に向かって話させるのではなく、友達に向かって「互いの考えの足りない部分」について話すようにさせていくことも大切です。

ポイント⑥　「卓球型」から「バレーボール型」で話し合う力を高める

教師と指名した子供の１対１のやりとりに終始しないようにしましょう。また、話し合える力を高めるためにも、話し合うことへの目的意識をもたせ、子供同士で発言をつなげるよう促したり、他の子供に再生させたりしていきましょう。

Note

- 子供同士での話合いに深まりがみられない場合は、「先生は〇〇と思うけど、みんなはどう思う？」など、教師と子供が対等な立場で語り合いましょう。
- 子供同士が互いを認め合えるような学びの場をつくりましょう。